

地域コミュニティの形成過程と高齢化

～流山市美田地区を事例に～

廣田 有里*

キーワード：コミュニティ形成，高齢化

1. はじめに

日本では少子高齢化が進み，平成 25 年 10 月 1 日調べ（平成 26 年度版高齢社会白書）では，65 歳以上の高齢者人口の総人口に占める割合（高齢化率）は 25.1%と過去最高を記録している。高齢者人口増加の中，高齢者の社会活動への参加も活発で，自主的なグループ活動への参加は，10 年前に比べて 6.2%の増加がみられる。その一方で，少子高齢化に伴い，高齢者層と若者層の日常的な交流機会が減り，地域コミュニティが弱体化していく傾向もみられている。

本論文で対象とする流山市の美田地区は，活発な地域活動により数々の賞を受賞し，地域のコミュニティの見本となっている。中でもゴーヤによるグリーンカーテン運動でエアコンの使用を控える運動は，温暖化防止に貢献したとして流山市の「グリーンカーテン写真コンテスト」で金賞受賞し，千葉県「CO2CO2（コツコツ）ダイエット選考会」で最優秀賞，さらに東京で行われた「ストップ温暖化『一村一品』大作戦全国大会」で優秀賞を受賞している。

美田地区のグリーンカーテン運動から，さらに流山市全体にグリーンカーテンを普及させる運動を行う「NPO 流山ゴーヤカーテン普及促進協議会」が生まれ，美田地区のメンバーを中心に活動を行っている。

しかしながら，活動が盛んな美田地区も，平成 26 年度 4 月 1 日調べでは，高齢化率が 40.9%と

非常に高い（流山市ホームページより筆者が算出）。地域で活躍している世代は，70 代が中心となっており，次世代のコミュニティの担い手が育っていないという懸念がある。

本論文では，活発なコミュニティの形成過程を美田自治会を事例に検討し，コミュニティを活性化させる要素を明らかにすることで，地域コミュニティの先進の見本とすることを目的とする。また，今後の次世代へのコミュニティの転換について考察する。

2. 流山市とコミュニティ

流山市は千葉県の北西部に位置し，都心へも 1 時間以内で行ける典型的なベッドタウンである。市政がスタートした昭和 42 年（1967 年）は，まさに東京を囲む半径 10～30km の地域に，マンションや戸建てが建設された時期である。図 1



図 1 東京の 10 km 圏と 30 km 圏

2014 年 11 月 30 日受付

* 江戸川大学 情報文化学科准教授 ソフトウェア工学

に示すように、流山市も東京から直線距離でおよそ23kmに位置する。

平成26年4月1日現在で流山市の人口は170,493人である。市ホームページのデータより筆者が5歳階級別の年齢と人口の関係を図2のグラフにまとめた。流山市の年齢別人口は、グラフに示すように、子どもの増加(図2の①)、子育て世代の増加(図2の②)、高齢者の増加(図2

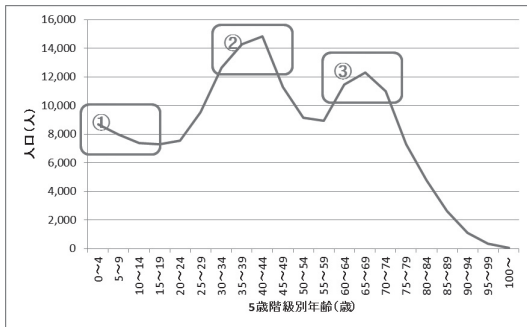


図2 流山市年齢別人口(平成26年4月1日現在)

の③)の特徴がみられる。

「都心から一番近い街」というキャッチフレーズで、緑の多さ、子育てのしやすさ、安心安全を打ち出しており、人口は緩やかな増加傾向にある。

流山市におけるコミュニティは、大きく分けると、自主的に有志が集まり、ある目的を持って活動する市民活動団体と、その地域に居住することで加入する自治会がある。市民活動団体の多くは、「流山市民活動推進センター」に登録し、行政や事業者と連携し活動を行っている。平成26年10月1日現在、市民活動センターに登録されている団体は175に上る。

流山市の自治会は、平成26年10月1日現在で178会あり、地域コミュニティの担い手となっている。平成26年3~4月に流山市コミュニティ課が実施した自治会長を対象としたアンケート調査によると、自治会長を務めて大変だったが良い人間関係が広がった点や、イベント実施により自治会のコミュニケーションが向上した点等が良い点として報告されている一方、次期会長の選出に苦勞している点や、自治会加入者の増加が思うようにいかない点等が苦勞している点として報告

されている。

詳細にみていくと、「自治会として力を入れていることは」という質問に対しては、イベントが48%、防犯活動が27%と高い数値を出しており、「地域の「つながり」が、防犯・防災につながる」と思い、実績のない「もちつき大会」を催し成功できた。大変だったが結果としては非常によい経験となった。」という回答からも、イベントを実施して地域のコミュニケーションの活性化を図ることにより、防犯・防災につながると考えて、実施している自治会が多いようである。高齢化問題は深刻で、アンケート結果の「自治会について活動の柱となる会員が高齢化しており、会務の執行の継続性において、相当な無理が生じはじめている。」や「高齢化もあり、後任役員のなり手がなく、人選に苦勞している。」という回答にもうかがえる。しかしながら、「三役に若い人を入れている。」や「諸活動のリーダー格が高齢化しているが、ゆるやかに現役世代に継承しつつある。」という意見もみられ、次世代への引き継ぎが行われ始めている自治会もみられる。

3. 流山市美田地区

流山市美田地区は、流山市の中央東側に位置し、柏市に近接する。元は、日立グループの不動産会社である中央商事株式会社(現株式会社日立アーバンインベストメント)により宅地造成された日立製作所社員向けの住宅地である。現在も、住民の約7割が日立グループ会社の社員もしくは退職者およびその家族である(美田自治会調べ)ことが大きな特徴である。同じ組織に所属している場合、組織に対する誇りや愛着が元から存在しており、美田地区は、組織に対する誇りや愛着から、地域コミュニティに対する誇りや愛着を育てやすい環境にあったといえる。

昭和46年(1971年)5月1日に「美田」という地名が誕生し、昭和49年(1974年)3月に自治会が発足した。平成26年となる本年、40周年を迎えた。今日に至るまでの歴代の自治会長は5

名おり、現在は5代目となる松島英雄会長が10年の任期を務めている。

「2. 流山市とコミュニティ」でも取り上げた流山市コミュニティ課が実施したアンケート調査によると、「自治会長になって何年になりますか」という質問に対して、回答が「1年未満」が12%、「1年以上3年未満」が62%、「3年以上3年未満」が9%、「5年以上10年未満」が10%となっている。1交代の会長が半分以上を占めるのが実態である。それに対して、表1に示すように、美田自治会は各会長の任期が長い。

美田自治会が流山市で一番活発な地域コミュニティとなったのは、松島会長が任期を務めている10年間である。松島会長は、自治会長になる前は4年間副会長を務めており、14年自治会の仕事に携わっている。コミュニティの基盤づくりには時間をかける必要があり、取り組みを継続していくことが何より重要である。松島会長は、長い任期で自治会の組織作りと、継続的な取り組みを成しえた。

松島会長は、自治会の組織作りにあたり、会長・副会長・会計・監事の他に7つあった部門の仕事をはっきりさせ、副会長を各部門のリーダーに置いた。更に、会長就任4年後に見直しを行い、会計を含めて5部門に整理した。見直しの内容は、環境衛生部・防災安全部を「安心町づくり部」とし、文化部・コミュニティ部を「活きいきふれあ

い部」とし、総務部・管理部を統括して「総務部」とし、会計も「経理部」として部門に組み入れた(図3参照)。組織変更を行った理由には、各部門の仕事を整理する意味合いと、部門を統合することにより部門ごとの人数が多くなり、負担が一人に偏らずに助けあうことができるからという理由がある。また、部門を整理したことにより、各部門に必ず一人は必要なパソコンを使用できる人材を、部門ごとに配置することができた点も重要である。

松島会長が定着させた取り組みには、防犯活動、防災活動、温暖化防止・環境活動、孤独死ゼロへの見守り活動、コミュニケーションの活発化の5つがある。これらの活動により、美田地区は、国から2件、千葉県から5件、流山市から16件の表彰状または感謝状を受けている。

防犯活動への取り組みは、「美田バスタークラブ」による防犯パトロールに代表される。「美田バスタークラブ」は自主防犯パトロール隊として平成15年8月に隊員24名で活動を開始した。平成15年12月より歳末パトロールを開始し、その活動が認められ平成17年には流山警察署より感謝状を授与された。その頃には、隊員は発足当初の3倍以上の85名となっていた。平成17年5月には流山警察署や消防本部の協力を得て「防災・防犯フェスティバル」を実施した。フェスティバルでは主要道路のデモパトロールを実施し、美田

表1 美田自治会の歴代会長

代	会長氏名	任期	在任年数	副会長
1代目	宮尾 武雄	昭和49年4月～昭和51年3月	2年	1名
2代目	馬場 義男	昭和51年4月～昭和54年3月	3年	1名
3代目	竹光 隆	昭和54年4月～平成8年3月	17年	4名
4代目	中川 栄一	平成8年4月～平成16年3月	8年	7名
5代目	松島 英雄	平成16年4月～現在に至る	10年～	組織化

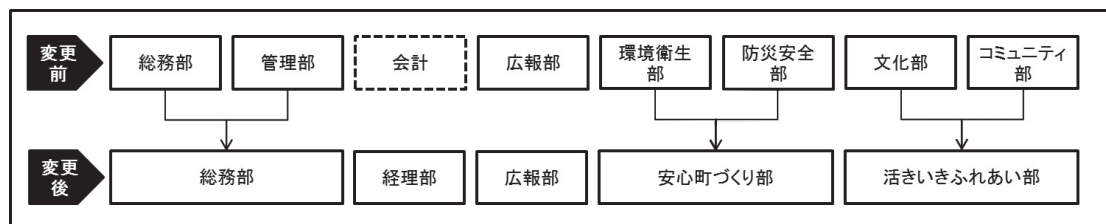


図3 美田自治会の部門の見直し

バスタークラブの他に消防本部音楽隊やパトロールカー、近隣自治会有志が参加し、大変なにぎわいとなった。フェスティバルの参加者は約600名であった。その後も美田バスタークラブは順調な活動をつづけ、隊員の数は100名を大きく超えている。平成20年度以降は「犯罪ゼロ運動」を推進し、挨拶を奨励する標語板130か所の掲示、夜間門灯・玄関灯・庭園灯等の点灯を啓蒙する運動を行っている。

防災への取り組みは、防犯活動の取り組みと一緒に行った平成17年5月の「防災・防犯フェスティバル」に始まる。平成17年10月には、流山市初の発災対応型防災訓練を行った。従来の防災訓練が、参加者が一箇所に集まり初期消火活動や応急救護訓練を実施するのに対し、発災対応型防災訓練は、現実に即したシナリオのない防災訓練といわれており、実際の災害時に自分があるであろう生活圏が訓練所となる。避難所に集まるまでに道がふさがっているかもしれないことも多く、地域の助け合いの輪が必要であることが実感できる。その他、起震車による震度の体験や初期消火訓練、煙の体験も行った。平成19年には西部防災センターで研修会を行い、48名が参加した。防災グッズとして購入したりヤカーや炊き出しセットは防災訓練で実際に使用して災害時に備えた。平成24年10月には、八木北小学校への避難訓練及び避難所開設を行った。この試みも流山初であった。

美田自治会の温暖化防止・環境活動は、大きく2つの内容がある。1つ目は「ゴミゼロ運動」の推進である。平成17年に第1回クリーンセンター見学を実施し、平成18年には「ゴミゼロ実施要領」を作成し、啓蒙活動を行った。2つ目はゴーヤによるグリーンカーテン作成を推進する「グリーン・ぐりーん大作戦」である。平成20年6月に地球温暖化対策としてグリーンカーテンを作成し、夏のエアコンの使用を抑えるグリーンカーテン運動を開始し、60世帯が参加した。2年目の平成21年には130世帯が参加し、流山市が主催したグリーンカーテン写真コンテストでは、美田

自治会は金賞(団体部門)を受賞している。また、平成21年11月には、温暖化防止を目的にした千葉県地球温暖化防止活動推進センター主催「CO2CO2(コツコツ)ダイエット」選考会で最優秀賞に選ばれ千葉県代表として全国大会へ出場した。平成22年2月に東京で開催された環境省主催の「ストップ温暖化一村一品大作戦」全国大会では千葉県代表として発表し、環境大臣より「優秀賞」を受賞した。その後、美田自治会の「グリーン・ぐりーん大作戦」と並行し、流山市全体にグリーンカーテンを普及させる運動を行う「NPO流山ゴーヤカーテン普及促進協議会」が誕生し、美田地区のメンバーを中心に活動を行っている。

孤独死ゼロの見守り運動は、厚労省モデル自治会として、平成18年にKD(孤独死対策)委員会14名を中心に活動を開始した。一人暮世帯の実態調査と見守り希望者のアンケートを行い現状の把握を行った。そして一人世帯の方との懇談会や昼食会を実施し、また、災害時の要援護者の支援体制を整えた。

コミュニケーションの活発化とは、様々な単位での人と人がふれあう機会を増やそうという試みである。「美田自治会班内懇談会」は、班内会員の親睦を図ることを目的として平成17年にスタートした。毎年10か所以上の班で実施されている。話題も近況報告や自治会にイベントに関すること、防犯・防災に関することなど様々で、会員の連携を図る役割を果たしている。平成20年から始まった「美田ティーサロン」は、だれでも気軽に立ち寄れる雰囲気を作り、新しい出会いが生まれる場を作るために自治会にオープンした。その他、自治会内にはいくつもの同好会が存在し、会員同士の交流の場を提供している。

4. おわりに

美田自治会の活発な活動は、住民に地域に対する愛着があり、リーダーシップを取れる人物がおり、自治会の中に役割分担の明確な組織を作り、長い年月をかけて地域に必要なことを計画的に行

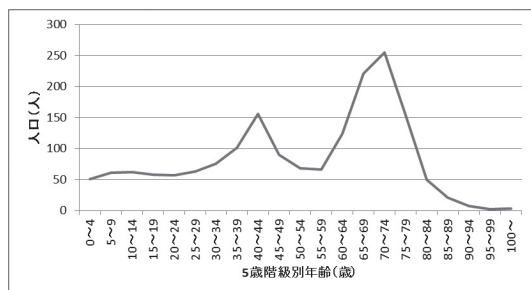


図4 美田地区年齢別人口 (平成 26 年 4 月 1 日現在)

った結果生まれたものと考えられる。

美田地区の5歳階級別の年齢と人口の関係を図4のグラフにまとめた。美田地区の人口分布は、流山市全体より高齢者層のピークの年齢が高く、子育て世代のピークは小さい。高齢化が大きな問題となっているのが見て取れる。今後は、いかに子育て世代を自治会の活動に巻き込んでいくかが課題になる。

デジタルメディア普及の影響で、自治体からの防災情報でさえもスマートフォンに送られるようになっている。便利な反面、そうしたツールを利用する人としない人の間の情報格差を埋めることは、社会的急務といえる。

筆者は2年前から「NPO 流山ゴーヤカーテン普及促進協議会」に運営委員として参加し、協議会のIT化に取り組んでいる。流山市民活動推進センターに依頼して更新を行っていたホームページを協議会独自の高齢者でも更新しやすいホーム

ページに刷新した。ソーシャルメディアでのつながりを作る基盤として、Twitter及びFacebookのアカウントを作成し、ホームページへの埋め込みを行った。Facebookの更新を担当する広報メンバーに対して、Facebook講習会を行った。Facebookでの情報発信を始めたことにより、今までとは別の繋がりができた喜びの報告を広報メンバーから受けている。

自治会の活動に参加してほしい30代・40代の家庭は共働きが多く、地区の活動に参加する時間がない。高齢者の情報源はテレビや紙面が主となり、若い世代は様々なメディアから情報を収集するすべを持っている。今後は、若い世代と高齢者がITを通してコミュニケーションを行うことにより、自治会の活動への若い世代の参加を促進し、高齢者の情報格差の問題を解決していくことを進めていきたい。

参考文献

- (1) 内閣府、「平成26年度版高齢社会白書(概要版)」, <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/gaiyou/index.html> (平成26年10月1日アクセス)
- (2) 流山市、「流山市ホームページ」, <http://www.city.nagareyama.chiba.jp/> (平成26年10月1日アクセス)
- (3) 美田自治会、「美田コミュニティHP」, <http://www.mita-jichikai.org/>, (平成26年10月1日アクセス)
- (4) 美田自治会(2014)、「40周年誌～最近10年の活動記録～」
- (5) 廣田有里(2014)、「高齢者が情報発信しやすいWebインターフェイスの構築」Informatio (Vol.11), 印刷中